

平成 29 年度第 2 回兵庫県スポーツ推進審議会 議事録

- 1 期日・場所 平成 30 年 3 月 6 日（火） 10:30～12:00
兵庫県立ひょうご女性交流館 「501」
〒650-0011 神戸市中央区下山手通 4 丁目 18-1
- 2 出席者
(委員 9 名) 山口委員 平川委員 尾山委員 小山委員
増田委員 廣瀬委員 窪田委員 陳 委員
石角委員
- 欠席：平野委員 倉 委員 吉矢委員 小林委員
鵜木委員 三木委員
- (幹事 12 名) ○高永幹事 ○市村幹事 松下幹事 羽原幹事
成田幹事 ○西田幹事 ○塚本幹事 ○土屋幹事
○升川幹事 長島幹事
山根スポーツ振興課参事 (陪席)
○住本兵庫県体育協会事務局長 (陪席) (○印は代理出席)
- 欠席：八木幹事 清瀬幹事
- (教育委員会) 高井教育長
- (事務局) 川崎副課長 榊副課長 岡本主任指導主事兼主幹
長谷川主任指導主事 坪田主任指導主事 柏木指導主事
- 3 開会あいさつ 高井教育長
- 4 委員・幹事紹介 名簿順による委員自己紹介及び幹事紹介
- 5 署名委員の指名 署名委員は、会長の指名により、増田委員、廣瀬委員に決定
- 6 前回議事録の報告
平成 29 年度第 1 回スポーツ推進審議会における報告事項（「平成 29 年度事業概要について」「日本スポーツマスターズ 2017 兵庫大会について」「第 2 期スポーツ基本計画について」）及び審議事項（「兵庫県スポーツ推進計画の取組を進めるための方策について」）について川崎副課長が説明し、承認された。
- 7 報告事項
平成 30 年度の事業概要について
① スポーツ振興課に関する事業概要について、長島スポーツ振興課長が報告した。
② 第 8 回神戸マラソンに関する事業概要について、山根参事より報告した。
③ 体育保健課に関する事業概要について、北中体育保健課副課長が報告した。
④ 障害者支援課に関する事業概要について、羽原障害者支援課長が報告した。
- 8 審議事項
(1) 平成 30 年度スポーツ振興団体に交付する補助金について
川崎副課長より、平成 30 年度スポーツ振興団体に交付する補助金の内容について説明し、承認された。

(2) 兵庫県スポーツ推進計画の取組を進めるための方策について

兵庫県スポーツ推進計画の重点目標1「スポーツをする子どもの増加と体力の向上」関連の「子どもたちを運動好きにさせる方策」、重点目標2「成人のスポーツ実施者の増加」関連の「スポーツクラブ21ひょうご会員数増加への方策」、重点目標4「障害のある人のスポーツ参加者の増加」関連の「障害者スポーツとの連携に取り組むスポーツクラブ21ひょうごの増加への方策」について、体育保健課・スポーツ振興課・障害者支援課の各担当課より説明を行い、審議いただいた。

9 その他の事項

■ 委員の主な意見及び事務局の説明

(1) 「報告事項 平成30年度の事業概要について」

[第8回神戸マラソンの開催]

【陳委員】

○ 第8回大会はブロンズラベルを取得したが、第7回大会との違いは何か。

【事務局説明（神戸マラソン）】

○ ブロンズラベルを取得すると、海外エリートランナー4カ国5人以上、男女それぞれの招聘が条件になっている。加えて、ここ3年のベスト記録が、設定された記録以上の記録を持った者でないと出場できないので、大会の競技レベルが上がると考える。

【山口委員】

○ 神戸マラソンは、ランナー評価がずっと高かったが、最近少し下がっている。いろいろ考えると、他の大会はフィニッシュした後の楽しみがある。神戸マラソンも当初のころは炊き出しがあったが、今、なくなっている。是非、何とか炊き出しとか復活していただいて、ランナー満足度を上げていただきたい。

【事務局説明（神戸マラソン）】

○ 今、協力いただける企業はないか、実際に足を運んで話を進めている。ただ、炊き出しをしていた頃に比べ、スペースが半減したため、炊き出しがなくなったと聞いている。工夫をしながらできる方向で取り組みたいと考えている。

【尾山委員】

○ フラットコースに変更を考えているのか。

【事務局説明（神戸マラソン）】

○ コースについては、神戸マラソン新コースの検討プロジェクト会議を既に2回、開催し、各有識者の皆様から意見をいただき、どうしたらスピードが出るのか、コーナーが少なくなるのか、安全にできるのか等、今、研究している。

【尾山委員】

○ インバウンド（外国人の訪日旅行者）はどこまでねらうのか。

【事務局説明（神戸マラソン）】

○ 海外居住者の誘客であるが、領事館や外国人団体との連携を、今後進めていきたいと考えている。

[国民体育大会団体競技強化プロジェクト]

【平川委員】

- 体協では、3、4年ぐらい前から、新たに選手、またはチームをサポートする新規事業がスタートした。それと今回の新規プログラムとはどう違うのか。また、なぜ国体でなかなか勝てないのかという分析はされているのか。

【事務局説明（スポーツ振興課）】

- 未来のスーパーアスリート支援事業は、主に東京オリンピックへの出場選手を養成するための事業である。今回は、国体で実績のある団体種目をさらに強化して、64点の団体優勝を目指すものである。国体では、少年の部ががんばっているが、成年になると、大学や実業団への所属で県外に流出するため、ふるさと制度を活用しているが、成年層をどう戻すかということが大きな課題であると考えている。ただ、女性はがんばっており、少年、成年ともに8位以内をほぼキープできる位置にある。天皇杯8位は目標であるが、まずは女性の8位、皇后杯の安定した入賞を目指すという考えである。

[ワールドマスターズゲームズ 2021 関西参加促進事業]

【山口委員】

- ワールドマスターズゲームズの参加促進事業では、新たな助成を行うということだが、選考はどうするのか。

【事務局説明（スポーツ振興課）】

- 本大会に向けて、同年代の人でチームを作るか、スポーツクラブで新しい種目に取り組むチームを作り、本大会に出ることを条件とし、締め切りを数カ月設け、選考したいと考えている。

[ひょうご女性スポーツの会（仮称）の設立]

【石角委員】

- ひょうご女性スポーツの会の設立をありがたく思っている。兵庫県の女子柔道でも、女子柔道の会というのをやっており、指導者や小学生、中学生の女子選手に限り、けいこやいろいろなスポーツの指導、医・科学的な講座を年に1・2回行っている。是非、このひょうご女性スポーツの会では、大人だけではなくて、若年である中学生、小学生の女子も対象に活動できる形であってほしい。

【事務局説明（スポーツ振興課）】

- 医・科学も含めた構成で考え、石角委員も含め、オリンピックのメダリストの先生方には、アドバイザーかアンバサダーという形で、ご協力願いたい。

[成人のスポーツ実施率]

【尾山委員】

- 「スポーツ立県ひょうご」のプロジェクトを通して、県民のスポーツ実施率を30年度、どれくらいに上げたいと考えているのか。スポーツ庁のデータは、52%に上がっている。

【事務局説明（スポーツ振興課）】

- 兵庫県は、県民へのアンケートより、独自にデータをとった数字がこの実施率となる。成人の20歳以上のスポーツ実施率は、平成27年度で、週1回の実施率が62%である。

[オリンピック・パラリンピック・ムーブメント展開事業]

【増田委員】

- 障害者スポーツの啓発という形で、バスケットボール、シッティングバレーボール、ボッチャ等の出前講座事業を展開している。チームレベルでは、バスケット

ボールだけでも年間 5,000 人、50 から 60 校を回っている。その中で、車椅子のバスケットボールでは、運営に年間 60 万円の個人負担をしながら展開している。

啓発では、ただ体験させる、見せる、話を聞かせるだけではなく、9 年前から子供たちに絵画展という形で障害者スポーツの絵を描いてもらう。昨年から日本財団が兵庫県のまねして、子供たちに絵を描いてもらうという取り組みを始めた。是非、障害者支援課とともにこの事業を展開していただけたらと思う。

(2) 「審議事項(2) 兵庫県スポーツ推進計画の取組を進めるための方策について」

[1 スポーツをする子どもの増加について]

[2 成人のスポーツ実施者の増加について]

[4 障害のある人のスポーツ参加者の増加について]

【廣瀬委員】

- 長年同じことをやっているという印象がある。学力向上と言えば、関心は高いが、体力向上に力を入れると、「自分と子供は運動苦手である。別に体力余りなくても勉強ができたらいい。」という保護者は、結構多いと思う。例えば、握力が 20 を切ったら大変なことになると、誰も発信しない。私も高校生を見ているが、二極化が非常に激しいと思う。体を動かすことが楽しいことをどれだけ知っているのかと思う。豊岡市では、幼稚園児から非常に運動好きにする先進的な取り組みが行われていたと思うが、有益な授業が全県に広まっているのかどうか。始めて何年かしかたっていないので、小・中に年齢が上がったときに、その効果が持続しているのかについて、検証はなされているのか。

【事務局説明（体育保健課）】

- ヘルスプロモーションの観点から、若い時から運動習慣等につけることで生活習慣病等を抑えて医療費控除、医療費の負担削減につなげていくという国の行政的な観点もある。例えば、我々教育委員会の関係であれば、学習指導要領で、高校 3 年のときから、一生続けていけるようなスポーツを 1 つでも見つけようということが、学習指導要領に明記され、取り組んでいる。

では、なぜ投能力なのかというと、テニス、卓球、ソフトボールやバドミントンなど、腕のスイング系の動作の習得は、後天的にマスターしていかないと身につかない。そこで、教員が体育の授業や部活動を通して、投能力を上げることが、生涯スポーツの普及、浸透につながるので、我々も行っている。

もう一点、長年同じような取り組みをしていると指摘があったが、これは、例えば、運動プログラムの DVD をつくり、視覚的に訴えている。最近では携帯タブレットなどで、手軽に先生方が DVD を活用し、グラウンドや体育館に持っていける。あるいは、授業の始まる前に、たった 1 分で今日のポイントを見て、授業に取り組んでもらえるように、DVD を編集し、プログラム化したものをタブレット活用できるようにし、時代に即しながら、取り組みを行っている。

最後に、豊岡市の取り組み等であるが、スポーツ庁が各府県の取り組みについて、冊子化を行っている。また本県でも体力向上のユニークな推進校については、表彰するとともに、取り組みを発表し、ホームページにも示している。

【山口委員】

- 鳥取方式の芝生を豊岡市は、幼稚園から小学校まで整備している。体力テストの結果をみると、芝生になって、結果が伸びたと出ている。鳥取方式はなかなか大変で、地域の人と芝生を植えていかないといけないが、是非、広められたらいいと思う。

【平川委員】

- このレベルの体力があれば日常生活、子供の心理、社会的発達等、健康にもい

いというレベルを決める体力測定が、これからの課題と思う。

兵庫の子供たちの体力は、握力とボール投げ等がとても劣っている。置きかえれば、握力は一瞬の最大筋力。ボール投げもある意味、スキルも入るが、一瞬の力である。今、兵庫は、時間が絡む 50m走や持久走が上がってきている。だから、瞬時の力、スピードを出すところが弱いということは、そういう筋の能力を出すという経験が少ない。子供たちは与えられた生活環境に適応した体力になっているから、単に体力の測定項目だけじゃなくて、その裏を見て、何が足りないかということと身体能力とともに、子供の生活、また学力も含めて体力を評価するということを考える必要がある。

その点において、運動プログラムDVDは、全県に広まったら絶対いいと思うが、まだ十分普及していないと思うので、ぜひ行政の視点で、学校まで展開できるようにしてほしい。

【尾山委員】

- 解決策は実はございません。3歳以上の運動が定着していない。母親が運動を見に行くのが好きであれば、その子どもはそうでない方の2倍以上運動好きになる。これは北米のデータであるが、ヨーロッパでもやったが、なかなか盛り上がらない。そうすると、今、おっしゃった、何とか以下では生活できないというボトムラインを提示するのは、1つのアイデアかなと思った。それから、母親を運動環境に引き込まなければならないが、日本特有な条件が2つある。1つは公園でボール投げができない。それから、池田の学校の件以来、学校がシャットダウンしている。地域のクラブ、指導者が足りないのに、全て学校体育に頼っているのか。ネガティブ要因は、日本の予備校とネットである。これを減らさないといけない。民間として、そういう事業に入ってもいいと思っているが、なかなか日本特有の予備校とネット社会というのがネックになってできない。

【窪田委員】

- 単にデータのみならず、いろんな捉え方が学校現場でも必要である。あわせて、子供たちを運動好きにさせることが体力の向上につながり、ひいては健康の維持増進だけでなく、けがの防止等々にもつながっていく。中学校部活動指導員配置事業と関連するが、部活動における外部指導者との調整の難しさ、また大会運営などの課題はあるが、部活動を通して、いい形で子供たちの体力向上につなげていければと、現場でもしっかりと考えていきたい。

【山口委員】

- 今、部活動のことが出たが、もう一つは、スポーツクラブ21の会員が減っている。これに関連し、部活動を地域と一体化するというスポーツ立国調査会の報告がある。そうすると、運動部活動への支援、運動部活動専門家会議の設置だけを議論しても、先のビジョンはちょっと弱くなっていく。スポーツクラブ21を何とか新しくしないといけない。これも一体化して議論しないと、部活動は部活動だけ、スポーツクラブはスポーツクラブだけというのではなく、地域に移行していくという、こういう方向性が、少しずつ国から提案されてくるので、ご意見伺えればと思う。

【陳 委員】

- 私も今、シニアでバスケットボールのクラブをやっているが、車椅子バスケットと一緒に楽しむ形をつくっていくことで、みんながバスケットボール楽しめるのではないかと。インクルーシブという言葉がよく出てくるが、そこに行けば、一緒に体を動かし、楽しむことができる環境をつくれば、子供から大人まで体を動かせる環境が作れるのではないかと。

【小山委員】

- 今、スポーツ好きな子供をいかに育てるかというのが大きなテーマだと思う。これは、基本に幼児期におけるスポーツ遊びが、非常に大きなウェイトを占めてくるのではないかと思っている。スポーツ推進委員会は、行事として、親子スポーツ遊び大会というのをやっている。豊岡市の幼稚園にも研修に行き、親子運動遊び研修会や大会を行った。参加されたお母さんが、子供とこんなに汗をかいて楽しいスポーツができたという感想を述べられておられた。親のスポーツへの関心を高めていくことも大切ではないかと思う。

【山口委員】

- 子供のころに楽しい経験や成功経験をする、これが生涯スポーツにつながるというのが国際比較調査から出ているので、子供のころに楽しいスポーツ経験するのは、非常に重要なことと思う。

【増田委員】

- 障害者だけのスポーツを推進するには限界があると感じている。当事者でスポーツをしたいという人がふえていない。今、いろんな遊び方ができる中で、あえてスポーツはしなくてもいいという考えになっている。学校も、特別支援学校を卒業した後、スポーツの場がない、そういったつながりがない。それをやっぱりつなげていかなければいけない。一方で、障害の方はふえる一方である。学校に通っている時は、水泳とか身近なスポーツをやっているが、就労してしまうと、トップはウオーキングとなり、スポーツじゃなくて自分への健康管理の中で運動している。身近な環境の中でスポーツできる場とか人のつながりができれば、自然とスポーツや運動実施者がふえていくのではないかと期待したい。

【平川委員】

- 私は、スポーツクラブ 21 が兵庫県に 800 近くあり、これが全て本当に機能したらすごい成人のスポーツ運動実施率になると思い、何とかこれが機能しないか、もっと実質的なものにできないかと思っている。今回、マスターズの動きも含めて、今後、中学校等のクラブ指導なども絡んでくるから、大きなチャンスと思っている。今回は本当に行政の方も、いかにして一般成人のスポーツ実施率を高めるかということを考えてほしい。

【山口委員】

- ゴールデン・スポーツイヤーズ、ラグビー、オリパラは、「見るスポーツ」であるが、ワールドマスターズゲームズ関西は、「するスポーツ」に入るので、エリートスポーツ、トップスポーツから生涯スポーツへ、するスポーツへという意味では、2021 が大きなイヤーと思っている。
今、審議されているのが、例えば 5 時までは中学校、これは校長、あるいは教育委員会が管轄する。5 時以降は、市町村小学校が管轄する。そうすると施設のところは委託料出す。すると総合型のところに財源がふえていく。ただし、法人格を持ってないと任意団体には出せないと思う。是非スポーツクラブ 21 も法人格をふやしていくということが重要になってくるのではないかなと思う。

11 閉会あいさつ 長島スポーツ振興課長

12 閉 会